## 城里町の文化財さんぽ（三一）

# 県指定文化財（工芸品）「礼盤」

指定年月日／昭和三七年二月二六日
所在地／城里町徳蔵　管理・所有者／徳蔵寺

礼盤は、法会の際に導師（法会の首座となる僧）が仏を礼拝し誦経するために座る台で、箱型礼盤と猫脚礼盤の二種類があります。一般的には、本尊を安置する須弥壇の正面に置かれ、盤上には半畳（正方形の畳）を敷き、左脇には脇台、右脇には磬台を備えます。

県指定文化財「礼盤」は、六三・五センチメートルの四辺形で、高さ一八センチメートルの猫脚礼盤です。盤上は、ヒノキ材の三枚矧ぎ付け、框（外枠の木）はケヤキ材で、周囲を面取りして漆箔（漆の上に金箔を接着）を施しています。四方脚は頑丈な木製の楔で固定され、その付け根には雲形の持ち送り（補強材）を付けています。

礼盤の裏面には四行の墨書があり、大工宮田三河守が製作し、天正六（一五七八）年九月二一日に太田寶鏡院（常陸太田市）の住職宥舜が、大師堂の礼盤として徳蔵寺に寄進したことが分かります。

墨書にある寶鏡院は、城里町石塚を発祥とする佐久山方真言宗の寺です。永享八（一四三六）年に太田若宮八幡別当寺及び佐竹氏の祈願所として開山されました。その後、佐竹氏と共に秋田に移ったと推測され、江戸時代には秋田城内にあったと伝えられています。

この礼盤からは、戦国時代末期における常陸国北部の様相をも窺い知ることができます。

解説文／町文化財保護審議会会長　小山映一

**問合せ**　教育委員会事務局
☎029－288－3135

# 文芸しろさと

## 俳句

母の齢姉の齢超へ秋袷　鯉渕　寿美恵
せつせつと残りたき虫夜の厨　今瀬　多代美
飛行雲ほどけて消えて秋の空　仲田　まちゑ
人恋し一人炬燵の日暮れかな　森　静江
湯の湖より仰ぐ男体霧襖　綿引　英子
急がない空気の中を木の葉散る　中野　千賀子
里山の夕日に映へて紅葉なり　飯村　昭子
車椅子囲める銀杏黄葉かな　竹内　幸子
鐘楼のひつそりと在り小春風　瀬谷　博子
庭先に色よく実る通草かな　岩下　金司
涌水の旨さ教えて小鳥飛ぶ　田口　勝元
登校の児ら皆無口冬将軍　寺門　孝子

## 短歌

老人のゲートボールに勤しめば秋ゆく藍の天空高し　杉山　みちこ
亡き夫の氣配覚ゆる晩秋の一日去りゆき霜月迎ふ　大森　久子
ふるさとの草深き小川の木の橋を思い出づ夏の日は杏くして　渡辺　千紗子
山百合の次々咲きて華やぎぬ今日を最後に花の散りゆく　所　美恵子
雨の日に息子につれられて投票のわが一票に平和ねがいつつ　山形　式妙
寺の裏そっとのぞけばひっそりと今年も咲きぬ赤曼珠沙華　枝　不美
ちちろ鳴く声も途絶えし晩秋の背戸を吹く風樫の実散らす　島　愛子
台風の情報ばかり気にしつつ紅葉見ぬ間に霜月迎う　信田　育子
診察の番くるまでを待ちあぐね待合室に雑誌をめくる　坪井　きよ子
十六夜のたなびく雲に乗りし月かぐや姫なら昇りゆきたし　萩谷　登喜子
奥久慈の空晴れ渡り永源寺陽にあかね色重ねるもみじ　富田　佐智子
秋桜祭に出かけた我にありがとと孫から電話嬉しく思う　薗部　光子
飛行機の中から雲海眺めつつ老いても我は生き方凄い　富田　欽子

## 川柳

ピンコロを願いつ今日も医者通い　富田　多蔵
筋肉を鍛えて元気高齢者　車田　綾子
今日もまたああ騒がしい耳鳴りが　飯村　孝一
サザンカの咲く頃合や冬仕度　川原　清